

植民地朝鮮における学校外の「国語」教育 ～『国語教本』『一日一語国語普及読本』 『国語の本』の三種に焦点を当てて～

上 田 崇 仁

1. はじめに

本稿は、植民地朝鮮において1939年から1943年にかけて発行され、学校教育の外で「国語」普及のために使用された教材三種を取り上げ、その内容の比較をテキストマイニングの手法で行うものである。

学校教育で使用された教科書の内容に関する研究は、李淑子の研究が詳細である。また上田（2000）でもその内容について、内地の国語読本との一致率を考察してきた。そこで明らかになった変化は、時代を追うごとに、朝鮮と内地の国語読本の内容の一致率が高まること、それも、朝鮮読本が国定読本の内容へと変化していくという一方的な変化であることを明らかにした。日本の植民地における「国語」としての日本語教育を検証するには、こういった通時的な変化を確認していく一方で、共時的な相違点も確認する必要がある。教育には目的があり、教育を受ける対象によって教育内容は異なっていることが考えられるからである。そこで、本稿では、1939年から1943年にかけて発行された一般社会人向けの国語教育用の教材を取り上げ、その内容を検討していきたい。本稿は、科学研究費補助金による「植民地朝鮮における日本語教育～計量言語学的手法から見る学校教育と社会教育との連携」（基盤研究（C）18K00685）によるものである。

2. 本稿で扱う教材三種の背景

まず、この教材三種の位置づけを確認しておきたい。

三種のうち、最も早く1939年に編纂された『国語教本』は、「簡易国語講習会」、のちに名を「国語普及講習会」と変えるが、ここで使用された教科書である。「国語普及講習会」とは何か、ということについては、井上（1997）からの引用になるが、「国語普及講習会概要」を紹介する。

国語普及講習会概要

- 一 主 催 各道
- 一 開催の場所 全鮮の小学校及び簡易学校
- 一 講 師 小学校教員
- 一 経 費 年額総経費七万円、一講習会当経費六〇円国庫補助
- 一 時期と期間 農閑期、六〇日以上
- 一 使用教科書 国語教本（本府編纂）
- 一 計 画 昭和十六年より実施、国語未解得者絶無となるまで
（推定昭和二十五年度）継続予定

一 実 績

年度	講習会数	受講者数	簡単ナル 会話可能者	片仮名 解得者	平仮名 解得者
昭和 13 年	3,660	210,373	92,564 (44%)	153,572 (73%)	58,875 (47%)
昭和 14 年	（整理中）	284,000（国語教本配布数）			
昭和 15 年		292,000（国語教本配布数）			

このように、この教材は朝鮮総督府が 10 年にわたる計画のもとに推進した国語普及活動の核となるものであったことがわかる。

次に、『一日一語国語普及読本』は、朝鮮総督府道視学の土生米作編のものである。ここにある「一日一語」運動とは、1942 年に始まった「国語全解運動」の中で展開され、国民学校の生徒を教員として基本的な日本語の語彙を家庭で学ぶようにしようとした運動である。本書は 1943 年 2 月発行の手書きのもので、奥付に「著作兼発行者 梁在〇¹」「印刷兼発行所 鍾路印文社」とある。『一日一語』運動に合わせて発行されたものと考えて間違いないだろう。こちらは、編者こそ朝鮮総督府道視学という肩書を持ってはいるものの、総督府が発行したのではなく、公的なものとは位置づけられないと考えられる。また、この運動自体が国民学校の生徒を教員として活用したものであるから、日常生活に関するも

¹印刷不明瞭で判読不能

のが主であったであろうことが推察される。

『国語の本』は、1943年に朝鮮総督府が発行したものである。『文教の朝鮮』(1942年8月号)に「国語の指導者へ『コクゴ』及び『コクゴノホン』編纂趣意」が掲載されている。『コクゴノホン』についての記述はこの教材の特徴を端的に示したものと考えられるため、全文を引用したい。漢字及びかなづかいは現在の漢字、現代仮名遣いに改めてある。

本書は国語講習用として編纂した教本である。従来用いられていた国語教本のごとき様相を持つものであるが、教材はことごとく新しい観点から書き改められ、具体的にして、実生活に即する教材が盛られている。

教材は大別して四部に分かれている。第一部は発音訓練とともに語彙の取得を目的としたものであり、五十音に従って絵を配してある。これは国語教本の場合とほとんど同一であるが、語彙として活用する場合の考慮が加えられている点異なる。なお国語教本においては、その編纂趣意を述べなかった関係上、この第一部について誤解を生じているようであるから、ここに付け加えることにする。五十音図に従って語彙を出した目的は、主としてかなの音声学的図表である五十音図によって、我が国語の「音韻」の識別と音声の実現としての発音法の訓練を行わしめんがためである。国語教育において、音韻と音声との区別を考慮してそれに対する訓練を行わないために発音は正しくても文字に書いたときには濁点を落とすようになるのであると思う。

第二部は基本文型である。基本文型は決してここに挙げたものに尽きるわけではないが、一応はこれで足りると考える。この文型の体得が爾後の学習の基礎となるのであるから、徹底的に習熟せしめることが肝要である。しかし同一な文型の反復は、とかく興味を失わしめる嫌いがあるゆえ、第一部において習得した語彙や身迎^{ママ}にあるものの名等を縦横に使用することを忘れてはならないのである。

第三部は会話である。

会話の教材はできうる限り具体的に、且つ実生活に表現してある。しかし、

会話の行われる場の説明および人物についての説明はこれを省略してある。場の様子をはっきりさせるためには挿絵を工夫してはあるが、それでもなお十分ではない。そこで指導者は会話の全体からその行われる場所および人物について正しく読み取り、これが指導に当たっては適当なる補足を加え、会話を文として読ませるのではなく、直に生きた会話として修練せしめるようにすべきである。会話の文章をただ暗記せしめて、これを暗唱せしめても、決して話す力が付くものではない。現実の場において言葉が行為の一部または全部として果たす役目を悟らしめることが大切なのである。又、会話である限り決して文章に記したとおりに発展するものでもない。この点への留意も肝要である。なお注意すべきことは、いわゆる口語文であってもそれが文である以上、話し言葉そのままではないと同様に、会話をそのままうつした教材といえどもそれを会話として再現するためには、よほど上手に演じなければ話ではなく読み方になってしまう恐れがあり、それが習慣となってぎこちない会話の調子を身につけさせてしまうことになる。

そこで会話の実際の指導が行われる所は、むしろ教材による取れんというよりも、教材を中心として（会話教材とは限らないいかなる教材においても）指導と学習とが行われる際にある。教授の進行中に指導者と非指導者との間に取り交わされる言葉こそ生きた会話なのである。この会話の重要性を忘却してしまつて教材の暗唱にのみ一生懸命になることは、労多くして効果を上げることは少ないのである。会話指導の材料と時と場所は、行住坐臥随時随所にあるのであるから、その材料と機会を適切にとらえ、またとらえさせて意図的に計画的に行う著意を欠いてはならないと思う。

第四部は文章である。

本書はその目的を日常の国語（音声言語としての）を習得せしめることに定めてある関係上、会話の力の涵養ということに主力が注がれている。これを教材についてみれば、入門の部を除いて三十教材の中、二十一教材は会話を主体としたものであるそこで文章と言えるものはわずか九教材に過ぎないのであるが、その中でも、四教材は文章教材というよりも基礎文型というべきものであり、残り五教材中に教材は手紙の形をとっているもので会話的な要素が非常に

濃い。結局純粋な文章教材破産教材に過ぎないのである。火曜に文章教材を少なくしたことは、本書においては、文の読解力の養成というよりも文章とはこのごときのものであるとの見本を示す程度にとどめたいからである。そこでこれらの取り扱いもなるべくこの意図の通りに、取り扱ってあくまでも聞く力、話す力の涵養を主とし、国民学校における上学年の文章指導のような方法に陥らないようにしてほしいのである。

これらの記述から、講習会で使用されたテキストとしての『国語教本』、その後継としての『国語の本』、家庭での学習を意図した『一日一語国語普及読本』と位置付けられるだろう。

2. 各教材の特徴

2.1. コーディング

ここでは、まず、三種の教材の特徴を総合的に観察し、その後、各教材の特徴を検討していく。

上田（2020）において、植民地朝鮮で使用された旧学部期の読本についてコーディングルールを検討し、仮に「学校」「家族」「生活」「自然」「軍事」というコーディングを行って分析を進めた。本稿では、社会教育の中で使用された教材ということもあり、新たなコーディングルールを検討した。

新たなコーディングルールは、2つで、「家族」「学校」「国家行事」「国家神道」「国家天皇制」「国家そのほか」「国語」「衣類」「衛生」「産業」「自然」「娯楽」「食品」「身体」「生活用品」「生物」とした「コーディングルール α 」と、「国家」がついているものをひとまとめにした「コーディングルール β 」の二種類である。

コーディングは、図1のように教材から抽出した名詞一覧を基に、どのようなカテゴリーの語彙に分けられるかを検討し、図2のように、ルールを作成することで行う。

	A	B	C	D	E
1	抽出語	品詞	出現回数		
9	かせ	名詞B	1	普通	
0	カマス	名詞	5	普通	生活用品
1	かわり	名詞B	2	普通	
2	キレ	名詞	3	普通	生活用品
3	けが	名詞B	2	普通	
4	こうもり傘	名詞	1	普通	生活用品
5	ごちそう	サ変名詞	1	普通	食品
6	こと	名詞B	4	普通	
7	ごみ	名詞B	1	普通	生活用品
8	ごみ取り	名詞	1	普通	生活用品
9	コメ	名詞	1	普通	食品
0	ごらん	名詞B	5	普通	
1	ご苦労	名詞	3	普通	
2	ご飯	名詞	3	普通	食品
3	ご無沙汰	サ変名詞	1	普通	
4	ご覧	名詞	2	普通	
5	サイレン	名詞	1	普通	生活用品
6	さま	名詞B	1	普通	
7	シャツ	名詞	1	普通	衣類
8	しるし	名詞B	1	普通	
9	スポン	名詞	1	普通	衣類

図1 名詞抽出作業の過程（部分）

37	*食品
38	おかず or ごちそう or コメ or ご飯 or セリ or そば or ニンニク or ネギ or メン or リンゴ or 塩 or 果物 or 種 or 汁 or 食べ物 or 食事 or 水 or 炊
39	
40	*身体
41	汗 or 顔 or 胸 or 口 or 喉 or 手 or 心 or 身 or 足 or 体 or 体力 or 爪 or 頭 or 腹 or 目
42	
43	*生活用品
44	かご or カマス or キレ or こうもり傘 or ごみ or ごみ取り or サイレン or ナイフ or ねじ or のり or ハガキ or バケツ or マッチ or ラジオ or ろ
45	
46	*生物
47	アリ or ツバメ or ポプラ or ポプラ or 鳥 or 瓜 or 牛 or 魚 or 桑 or 鶏 or 犬 or 蚕 or 枝 or 鹿 or 小鳥 or 虫 or 鶴 or 豚 or 猫 or 馬 or 綿羊 or 雄鶏
48	

図2 コーディングルール作成の過程（部分）

このコーディングルールを適用する前に、出現する名詞をそのままに対応分析したところ、次のようになった。それぞれ□で示された教材に特徴がみられる。

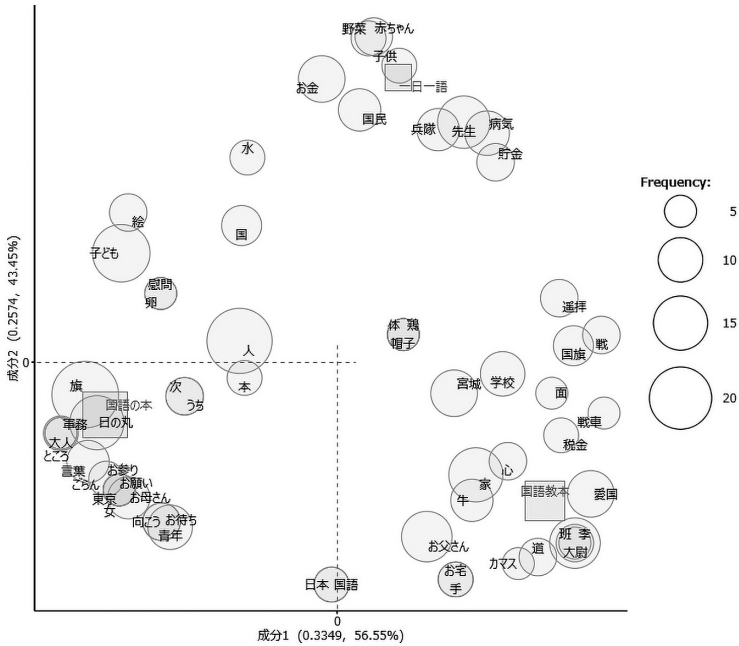


図3 対応分析図 三種の教材の特徴

コーディングルール a を適用したものが次の図4になる。図3のほうがそれぞれの読本に掲載された語彙の特徴がよくわかる。一方の図4ではコーディングを行った結果、三種の教材が中心に集まってきているように、差が小さくなるように見える。抽出された語彙がコーディングによるカテゴリー化を経て、どの教材とかかわりが深いのかを見ると、いずれの教材も、カテゴリーとしては大きな違いがないように見える。これはこの時期のテキストの内容が分野のカテゴリーとしては類似している、または、この時期の学校外における「国語」としての日本語教育の特徴であるといえよう。バブルの大きさは、出現頻度を示していることから、どのような語彙、カテゴリーが多用されているのかもわかる。

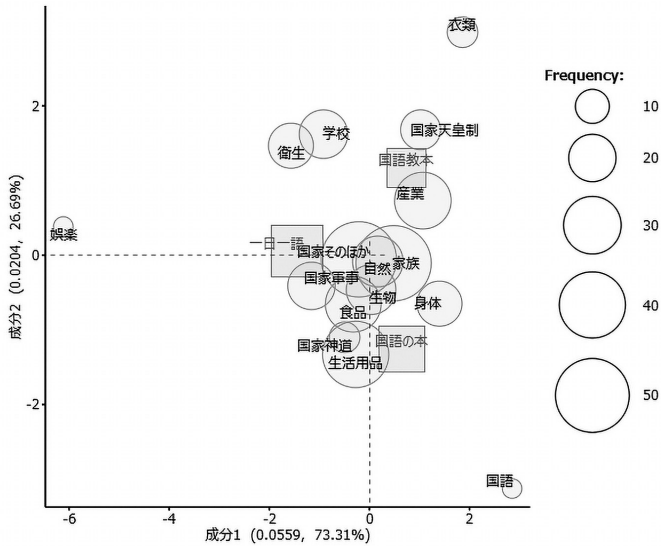


図4 対応分析図 三種の教材の特徴 コーディング α の結果

図4では、国家に関する語彙を細分化したコーディング α の結果を示したのだが、次の図5では国家に関する語彙を細分化しなかったコーディング β による対応分析図を描いてみた。

図4から確認できるのは、原点に近いカテゴリーに、「国家」「家族」「自然」「生物」がある。それぞれの教材の名前の位置を見ると、縦軸が時期、つまり、上から下へ古いものから新しいものへという流れが見られる。横軸で見ると、『国語教本』の後継が『国語の本』とされているように、内容の面での違いが見えるのではないかと。この点は図5でも同様に示されている。

では、個々の教材の内容を検討していく。

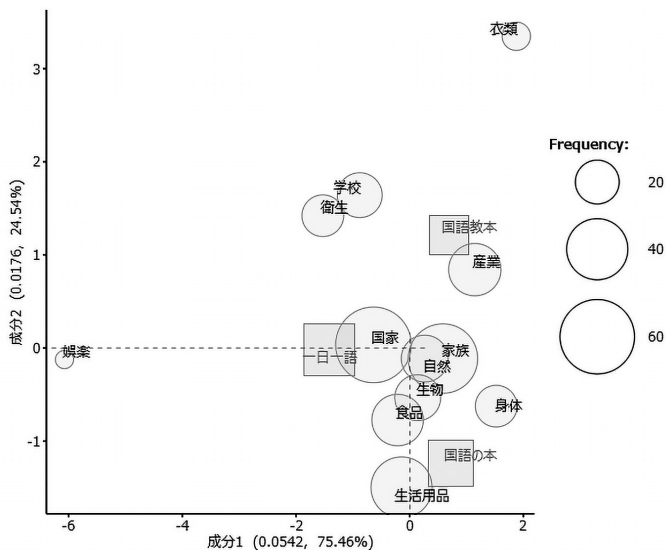


図5 対応分析図 三種の教材 コーディングβの結果

2.2. 『国語教本』(1939年)

この教材は、冒頭に基本文型や語彙を集めたページで構成された導入部があり、その後、第1課から第28課までの教材が掲載されている。

教材に採用された仮名遣いは、この教材独自の表音仮名遣いである。この仮名遣いは、当時の学校教育で採用されていた「普通学校用仮名遣法」とは異なっている。

冒頭の基本文型や語彙を集めたページの詳細を記述しよう。

図6に示したように、五十音の清濁半濁に合わせたイラストとその語彙が一对一で示されている。次いで、掲載されていたイラストに沿って、「イエ ガ ア リマス。」といった存在文が挙げられており、名詞のリストがそれに続き、今でいう、代入ドリルができるようなキューが与えられている。それに続き、「～テイマス」が導入され、て形に活用した動詞が挙げられている。それに続いて、名詞修飾文とそこに用いられる形容詞が色、形状、形容動詞が語彙として示されている。家族を言う名詞が続き、「～つ」の数、「～枚」の数が扱われ、所有の「の」を使った対話文、あいさつ文で終わり、第一課へと続く。



図6 『国語教本』の語彙ページ

表1 『国語教本』のタイトル一覧

課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル
1	市日	8	国旗	15	面事務所	22	愛国班問答
2	買い物	9	田植え刈り取り	16	税金	23	儀礼準則
3	道で	10	お手伝い	17	副業	24	青年団員の日記
4	挨拶	11	お墓参り	18	更生の喜び	25	愛国日
5	四方	12	生活改善あいうえお	19	手紙	26	真心
6	訪問	13	農楽	20	婦人会	27	志願兵
7	国語の稽古	14	迷信	21	私どもの愛国班	28	軍神とその母

図7の共起ネットワーク図を見ると、バブルの大きさが出現頻度を反映しているのだが、「班」「愛国」という語彙の頻度が高いこと、この語彙を含むネットワークのグループが多くの語彙を含んでいることがわかる。ネットワーク全体を見ても、このグループと破線で結ばれてかなり広い語彙のネットワークを示している。語彙の一つ一つを見ていくと、この一番語彙の多いグループは、愛国心を向上させる語彙のグループとなっていて、戦争そのものを示すものとは強いネットワークを築いてはいないことがわかる。また、働くことも、農作業と思われるグループと学校のグループにも含まれており、このテキストの特徴は、「勤労精神の喚

起と愛国心の育成」にあったというのが妥当だろう。

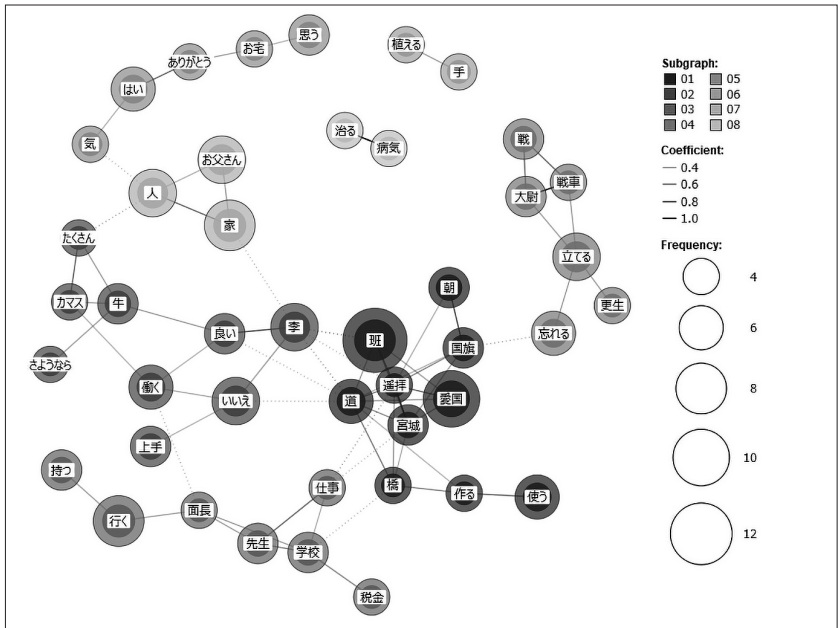


図7 『国語教本』共起ネットワーク図

2.3. 『一日一語国語普及読本』(1943年)

この教材は、冒頭に君が代が掲載され、第1課の後に五十音図が掲載されている。仮名遣いは、棒引き仮名を採用した表音仮名遣い²である。この仮名遣いは、併合前に一時採用されていた仮名遣いだが、併合後は学校教育の場では採用されていない。本稿では検討できなかったが、上述したように、この教材が、国民学校生徒が教員役として各家庭での指導を想定していたのであれば、国民学校で採用されていた歴史的仮名遣いで書かれているのが妥当だと思われるが、実際の発音と異なる仮名遣いを国民学校の生徒に説明させることの困難さは想像するに難くない。実際にどのような経緯でこの仮名遣いが採用されたのかについては、さらなる資料の収集と分析が必要であろう。

² 国定第一期読本や、学部本に類似している。学部本とは、日本が挑戦を併合する直前に使用されていた「日語読本」の一つである。

表2に示したように、このテキストは、「家庭編」「修養編」「学校編」「社会編」「国家編」と教材が個人的な話題から国家的な話題へと整理してあるのが特徴である。また、社会編にしても国家編にしても、日常生活から乖離したものは少なく、生活に密着した日本語の習得を目指していたことが推察される。

表2 『一日一語国語普及読本』のタイトル一覧

課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル
1	アサ	14	ニワトリ	27	カズ	40	テイシャバ
2	スイジ	15	ラジオ	28	社会編 ホーモン	41	ビョーイン
3	ヤサイ	16	エーガ	29	シンモツ	42	国家編 ジンジャ
4	ソージ	17	学校編 ガッコウ	30	ケツコン	43	コッキ
5	シヨクジ	18	ニューガク	31	ミマイ	44	セツヤク
6	センタク	19	セート	32	シュツサン	45	チョキン
7	カゾク	20	センセー	33	ケガ	46	ジューゴ
8	ヤゲ	21	セイセキヒン	34	オトシモノ	47	イモンブクロ
9	イフク	22	ケッセキ	35	イチバ	48	ケンキン
10	ハヤクネル	23	ソツギョー	36	ヤクシヨ	49	カイランバン
11	修養編 ドクシヨ	24	カズ	37	キンユクミアイ	50	ジョーカイ
12	エンソク	25	カズ	38	ユービンキョク	51	ヘーエキ
13	ハタケ	26	カズ	39	タヨリ		

図6を見ると、左に学校を話題としたネットワークがあり、中央下部に子どもや病気に関わるネットワーク、右に飲食のネットワーク広がり、「節約」「兵隊」「献金」といった語彙でさらにネットワークを広げている。この教材が、国民学校の生徒を教員として想定していることから、学校の語彙が多いことは肯ぜられることであり、日常生活の中で使う日本語の学習が、国家や軍事に関することよりも優先されていることが見える。国家や軍事に関する語彙がないわけではない。中央上部に「国旗」「宮城」「遥拝」という語彙がネットワークを作っていることがわかるが、他との共起は非常に弱い。このテキストの特徴は、「食事、家庭、学校という日常生活」と言えるだろう。

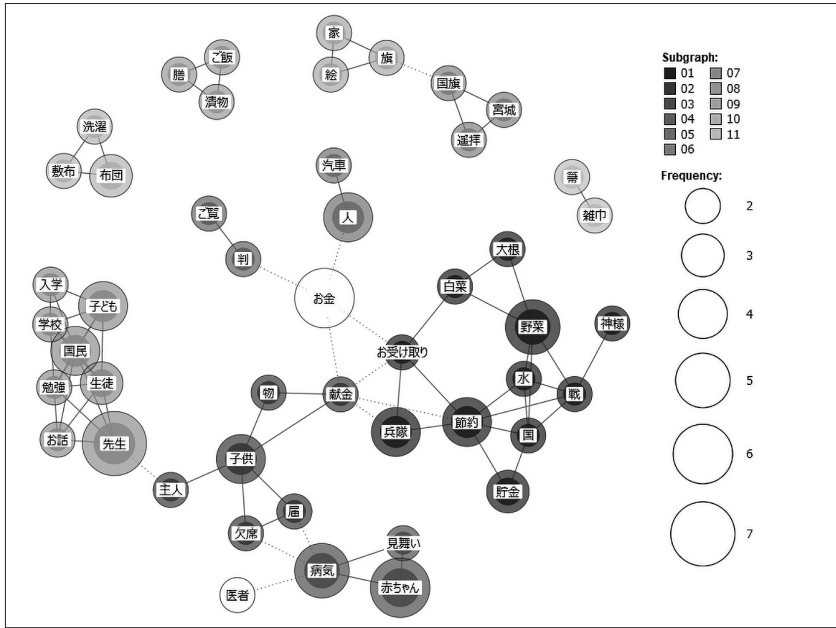


図8 『一日一語国語普及読本』 共起ネットワーク図

2.4. 『国語の本』 (1944年)

この教材は、『国語教本』のスタイルを引き継いでおり、冒頭に基本文型や語彙を集めたページが続き、その後、第1課から第30課までの教材が掲載されている。先に編纂首位を引用したので、ここで重複する内容を示すことは避ける。

しかしながら、教材に採用された仮名遣いは、『一日一語国語普及読本』と同じ棒引きかなを採用した表音仮名遣いであり、朝鮮総督府が制定した独自の表音仮名遣いではない。

冒頭の基本文型や語彙を集めたページの詳細を確認しておく。

図9を見てわかるように、図6と酷似している。語彙の一致を調べると、全75のうち、同じ語彙が採用されているのは44、約59%であった。この部分で異なっているのは、単に語彙を上げているだけではなく、「コレワ ナンデスカ。ソレワ アリデス。」のように、会話の中で語彙を示していくという教授方法の変化が見られる。

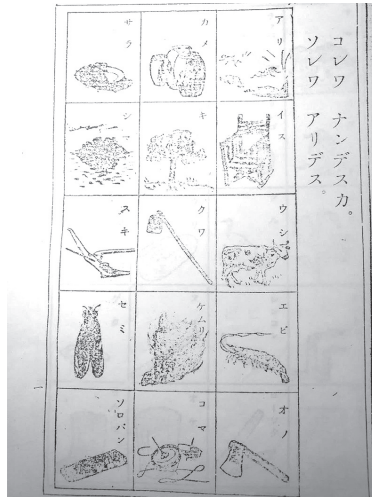


図9 『国語の本』の語彙ページ

語彙の後も『国語教本』とほぼ同じで、存在文、家族、形容詞、動詞の形という順で基本文型が示されている。図10で比較しているように、『国語教本』が代入する語彙を列挙しているだけだったのに対し、『国語の本』では代入する語彙もイラストとともに示してある。

表5に示したような構成で、こちらは、『国語教本』との共通点はあまりない。社会状況の変化が反映したものとして、『国語教本』では「志願兵」が教材として取り上げられていたのに対し、こちらでは「兵役」が教材として取り上げられている。これは、朝鮮半島における徴兵制の導入にかかる変化と考えられる。

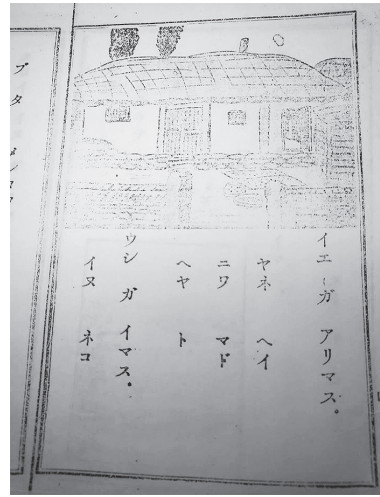
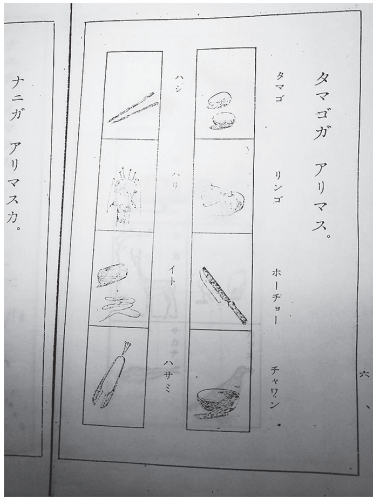


図 10 導入部分基本文型語彙提示の違い 左『国語の本』(1944) 右『国語教本』(1939)

表 3 『国語の本』のタイトル一覧

課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル	課	タイトル
1	アサ	9	ミチオ キク	17	ジュンササン	25	いもんぶくろ
2	マチ	10	ハンタイノ コトバ	18	面事務所	26	へーえき
3	ミナト	11	ユービンキョク	19	ニューガクノテツズキ	27	ないちから
4	ニワトリ	12	カイモノ	20	オカーサントコドモ	28	東京から
5	四キ	13	シヨクギョーシヨウカイシヨ	21	びょーきみまい	29	神宮参拝
6	ワタクシノ一日	14	キンユークミアイ	22	常会	30	日の丸の旗
7	ハタケデ	15	オタノミ	23	こくごのべんきょー		
8	ジドーシャノノリバ	16	ゴチソー	24	とけー		

この教材から抽出した名詞の共起ネットワークを図 11 に示した。出現頻度を見てみると、意味のあるものとしては、「旗」「日の丸」といったものが目立つ。この語を含む共起ネットワークには、「国」という語も含まれているが、極端な愛国的な用語のネットワークにつながっているわけではない。左下にある「宮城」

を含むネットワークも、「お参り」「拝む」「参る」といった言葉があるが、頻度はそれほど高くない。『国語教本』に比べると、特徴があまり見られない教材のように感じる。一点、言葉に関するネットワークが他にないものとして指摘できるだろう。

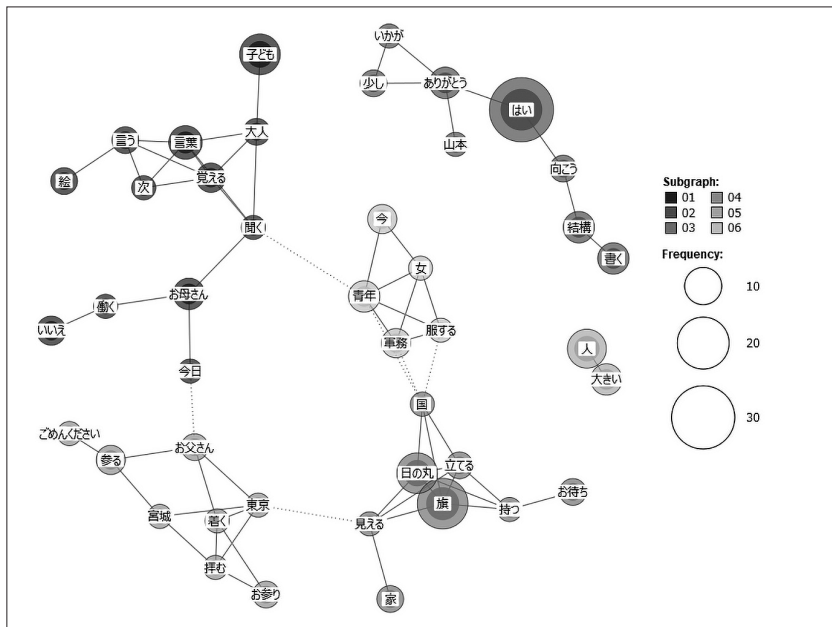


図 11 『国語の本』 共起ネットワーク図

3. 三種の教材の共起ネットワークから

ここまで、3種の教材の特徴を見てきたが、それぞれの語彙の使用について改めて確認し、その特徴を考えたい。

図 12 は、使用されている語彙についてそれぞれの教材から共起ネットワークを描いたものである。興味深いのは、『国語教本』と『国語の本』で5以上の頻度で共通しているものは思いのほか少なく、「家」「お父さん」の2語にとどまる。一方、『国語教本』と『一日一語国語普及読本』は学校に関する語彙や国家に関する語彙が共通するものとして指摘できる。他と共起せずに特徴的な語彙はそれぞれのテキストの外側に示されている語彙になるが、「特徴があまり見られない」

と上述した『国語の本』は、5以上の使用頻度で共起していない語彙はそれなりにあるものの、いずれも頻度はそれほど多くない。上述したように、言葉に関するネットワークが特徴的で、「言葉」「国語」といった語彙が他とつながらず存在している。

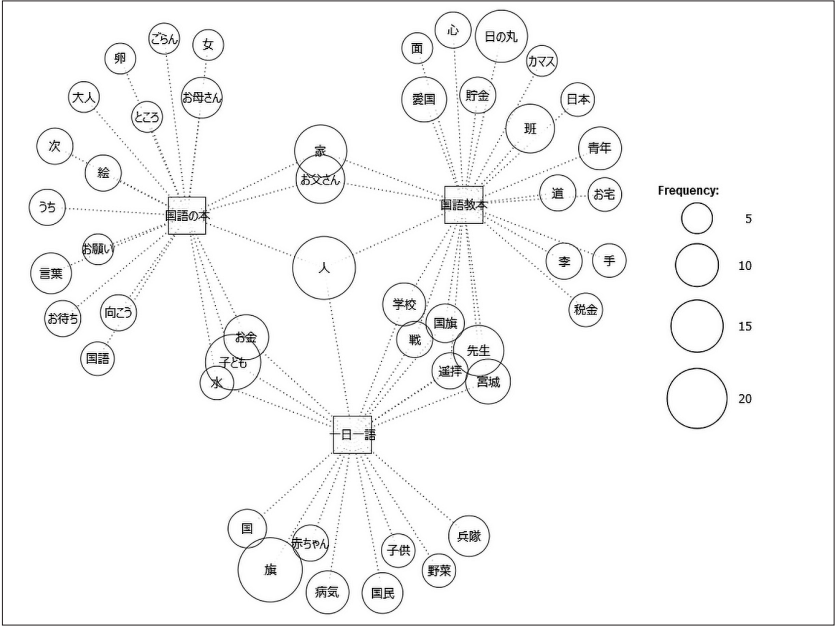


図 12 三種の教材の共起ネットワーク図

一方、図 13 で示したように、コーディングした結果を見ていくと、「国家」と「家族」に関する語彙がそれぞれに共通して使用されていることがわかる。そのうえで、やはり、『国語教本』とその後継であった『国語の本』での共通点は少なく、『一日一語国語普及読本』と『国語の本』が「生活用品」に関する語彙が共に高い頻度で使用されていることがわかる。

『国語教本』は「産業」に関する語彙が特徴的であり、『国語の本』では「食品」に関する語彙が特徴的であることがわかる。

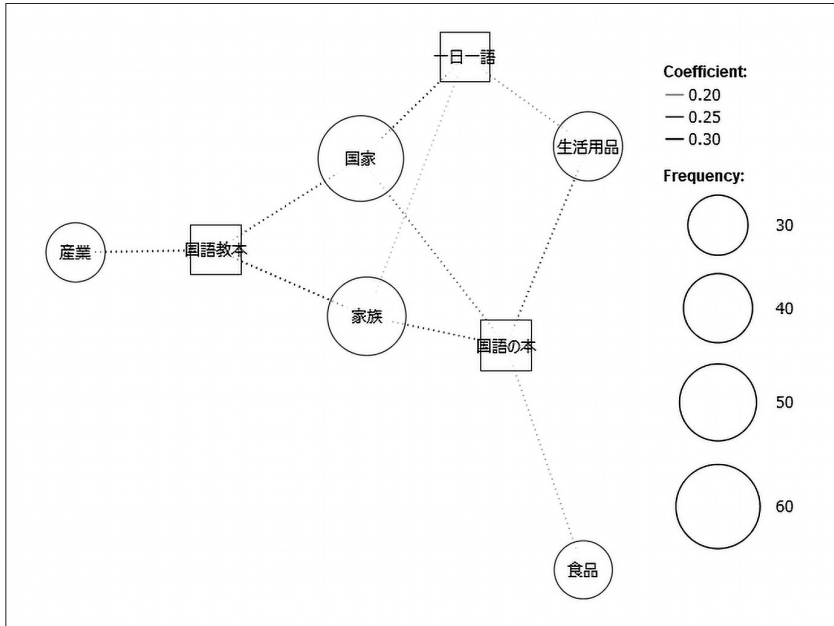


図 13 三種の教材の共起ネットワーク（コーディングβ）

4. おわりに

今回取り上げた三種の教材は、社会教育として行われた日本語教育用の教材であるという共通点があり、1939年から1944年という限定された期間に発行されたものである。それぞれの教材の背景は先に述べたとおりだが、それぞれの特徴を本稿ではテキストマイニングの手法により検討してきた。

本稿で整理した特徴を一覧にしたものが表4である。

表 4 三種の教材の特徴

書名	仮名遣い	構成	共起ネットワークの特徴	そのほか
『国語教本』 (1939)	教材独自の表音 仮名遣い	導入 + 28 課 (84 頁)	労働の喚起と愛 国心の育成	朝鮮総督府編纂
『一日一語国語 普及読本』 (1943)	教材独自の表音 棒引き仮名遣い	51 課 (57 頁)	食事、家庭、学校 という日常生活	土生米作編
『国語の本』 (1944)	教材独自の表音 棒引き仮名遣い	導入 + 30 課 (89 頁)	国語や言語学習	朝鮮総督府編纂

時局柄、軍事的內容、皇民化的內容、国家神道や天皇制に関する內容が多いと思っていたのだが、実際はそうではないということが見えてきた。学校教育の外で行われていた「国語」教育については、上田（2023 印刷中）において、ラジオ講座や新聞連載講座について扱った。そこでは、1940 年代に入ってから「国語」教育が非常に多様な試行錯誤（対象者や日本語レベル、話題など）を行っていたことを示した。だが、この 3 種の教材は、全体として何を誰に教えるのか、というところがぶれていないと考えるのが妥当だろう。新聞連載の講座と大きく異なる点である。

本研究は、学校教育と社会教育がどのように連携していたのか、あるいは連携していなかったのか、それぞれの特徴はどのようなものなのかを明らかにする研究の一部である。

今回、日本語教育的な視点からの考察は行っておらず、文型の難易については何ら検討を行っていないが、その点については、別稿で追いたいと考えている。

参考文献

- 李 淑子（1985）『教科書に描かれた朝鮮と日本—朝鮮における初等教科書の推移 1895-1979』、ほるぷ出版
- 李 鍾國（1991）『한국의 교과서』大韓教科書株式会社
- 井上 薫（2001）「日帝末期朝鮮における日本語普及・強制的構造—徴兵制度導入決定前後の京城府を中心に」『釧路短期大学紀要』（28）
- 上田崇仁（2019）「朝鮮総督府編纂教科書の通時的研究—違いを視覚化する試み—」（査読付き論文）、単著、2019 年 12 月、『新世紀人文学論究』第 3 号、pp.85-96.
- （2020）「旧韓末『日語読本』考」、『南山大学日本文化学学科論集』第 20 号
- （2021）「植民地朝鮮で「国語」は何を教えたのか」『東アジア文化研究』第 1 号、pp.17-29.
- （2021）「研究ノート「旧韓末『日語読本』考」、『南山大学日本文化学学科論集』第 21 号、pp.23-35.
- （2021）「『日語読本』の特徴：併合前の教科書は何を教えたのか」、『新世紀

人文学論究』第4号、pp.191-202.

—— (2023) 「第7章 マスメディアの中の日本語教育—ラジオ放送と新聞連載
講座—」『植民地朝鮮と京城放送局（仮題）』（印刷中）

佐藤由美（1994）「保護政治下における韓国学部の教科書政策」『戦前日本の植民
地教育政策に関する総合研究』（平成四・五年度科学研究費 総合研究（A）
研究成果報告：研究課題／領域番号 04301034）

樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版

韓 中瑄（1997）「開化期 日語教育에 관한 考察」『日本学報』第38輯

* 本論文は、科学研究費補助金による「植民地朝鮮における日本語教育～計量言
語学的手法から見る学校教育と社会教育との連携」（基盤研究（C）18K00685）
によるものである。